

う。

このように長州藩は相模国備場においては住民に対しても善政を施したので、一二年たった今日も語り伝えられ、不幸にして勤務中に病氣や震災で死亡した人達に対しても手厚い供養が営まれているのである。

(萩市・開業医)

## いわゆる「ターヘル・アナトミア」と解体新書の比較（その四）

酒井 恒

解体新書卷の四の内容をいわゆる「ターヘル・アナトミア」のそれと比較したので、その主な相異点を、紙面の都合によりその一部を略して記す。個々の用語については略す。

第二十三表 脾臓について「暗赤色」を其色青紫と記し、また、後表の肝臓及び腎臓の色も原典とは異なる。その形状は「それが取り出された動物自身の舌におおよそ一致する」を其形者如牛舌と訳す。脾動脈の「血液は脾臓の中に流れ込む」を是従此送内血と主語を変え、脾臓の作用に製血を加え、原典では胆汁が脾臓から肝臓の中に分泌されるとしているのに対し佐肝之分利胆汁也と訳し、門脈についての解体約図の誤りを訂正している。

第二十四表 肝臓及び胆嚢について、肝臓の下面の状態

を下則高低と簡明に記し、門脈の名称が、「肝門から肝臓の中に入ることに由る」のを其門即門脈所内故取之名と訳し、意味を取り違えている。「門脈の最も上の部分」の訳も門脈之支脈在上と異なる。「小葉間結合組織」を宜律素泥都私膜とオランダ語を直訳し、「総胆管」を肝与胆二管と訳し、蓋其汁至此而長を加えている。「肝臓の最下部に接す」を附肝之後と訳し、その「頸」を其頭と誤訳している。胆嚢と肝臓の關係の説明はむしろ原典よりもわかりやすい。胆嚢の壁の各層の名称をその状態と誤っている。

第二十五表 腎と膀胱について、その形「豆」を如蚕豆と、また、「平たい二つの腺」である副腎を其状如機里爾之偏者と詳しく記し、その内腔の「褐色」の液を淡黒と訳し、「殻様構造」(皮質)を如木皮と訳す。以次第轉輸と腎乳頭の附小管所輻湊之処を加え、膀胱底及び膀胱頸をそれぞれ「囊底」、「囊口」と、また、尿管を尿道、尿道を小水管とオランダ語を直訳している。「膀胱は腹膜の折り重ねの中にあり」を并私沙屈第二襲之処也とむしろ原典よりわかりやすい。膀胱の固定「下は腹膜によって恥骨に、また尿道の助けによって生殖器に固定されている」の訳は其

下者連横骨屬陰器以佐小水管と異なる。

第二十六表 両性における生殖器について、「精巢を陰囊」と訳し、「陰囊と呼ばれる特別な小囊の中に閉じ込められている」を訳さず、「精巢縦隔」及び後記の「包皮」には触れず、「精巢鞘膜」及び「精管」をそれぞれ莢様、離養道と直訳し、「精巢上体は精巢の上に載っている」の訳は辜丸之上辺と異なる。精囊に射出其精を、前立腺に嫩而空也を加え、「陰茎海綿体、このものは一つの隔壁によって互いに隔てられている」の訳は是佐勃起且瀉精と異なる。「小陰唇は尿道の近くにある二枚の小裂片である」を両小肉翅親附小水管と誤り、「そこから処女膜痕ができる」を其膜従似米縷都之皺者生と訳し、註を加えているがわかりにくい。子宮薄肉也を加え、「胎児が妊娠中に通常滞在する場所である」及び「しかし、懐妊した女ではその内腔は著しく広げられる」を訳さず、平常敢不縮脹を加え、「卵胞から胎児が生ぜしめられる」の訳は是主使精盛於此也と原典とは異なる。

第二十七表 胎児について、妊娠篇と訳す。凡婦人孕子および如環無端也は原典にはなく、胚と胎と産を區別し、

「胎児を包む薄膜」を血脈膜と緊膜に分けている。外耳道での一膜とは耳垢であろうか。「骨は……数も多い」を無異大人とむしろ正しい。羊水を「胎児が臨月に口を通して飲む」を是為便産と誤訳し、「尿膜」を訳さず、胎児の姿勢について注を加え、学者無以所其不見而生疑云爾と重大な教訓を添えている。

第二十八表 筋について、「筋腹は筋自身の肉質の部分であり」の訳は筋之中間平而如膜之処也と異なり、「筋頭と筋尾は次のような強い腱となっている。すなわち、そのものどちらも幅が広いかあるいは帯状であれば、それは腱膜とも名付けられ」の訳は筋頭筋尾者多即筋根也否則広而起否則從蚕度起と少し異なる。筋の名称のうち一部を訳さず、一部を誤訳し、筋のはたらき及び作用のうち「一つの筋の作用、あるいは運動はその線維の収縮にある」を其筋之動也一筋掣之則支別皆掣焉と訳し、「いくつかの筋において時間を変にして別々に両端が動き得る」を訳さず、運動の名称を用語を用いず平易に説明している。筋の起始、停止の名称には一部誤記、あるいは書き落としが認められ、また、椎骨、肋骨等の記載では個数を序数と誤つ

ている部分が所々に認められる。「これらの諸筋は学徒のためにも初めははなはだ重要であるというわけでもない」の訳は然古人所發明拳之於左と異なり、「また、耳珠及び対珠の諸筋については訳さず、坐骨を髀骨と、下腿骨を脛と記している。

卷之一から卷之四までを通読し、一部には意訳あるいは誤訳と思われる部分もあるが、全体の訳が正確なことから判断して、杉田玄白らは原典の大部分をはなはだよく理解していたと思われる。

(名古屋大学医学部解剖学第一講座)